
囁く声に手と影重ね

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囁く声に手と影重ね

【Nコード】

N8509Y

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

これは、ごく普通の少年が綴った、ごく普通の少女との恋模様です。

幼い頃の別れと、その後の再会から再び動きだした恋心。

それをテーマにしたごく普通の純愛モノを、ごく普通のテンションで、ごく普通に書いてみました。ごく普通の、とてもありふれた恋愛小説です。

回想調なので少々盛り上に欠けるかもしれませんが、楽しん

でいただけると幸いです。

（某所の夏企画用）

なぜそうなったのか、未だに僕は理解できないでいる。

彼女は最後まで笑っていたし、その姿に悲壮感は微塵も無くて。

けれど、事実は僕に一つの結果を突きつける。

彼女は——自分が住むマンションの屋上に僕を呼び、そこから飛び降りた。

僕の目の前で、僕の好きな人は死んだ。

一年経って、僕の元に一通の手紙が届けられた。

彼女の遠い親類が、荷物の整理中に偶然見つけたらしい、と聞いた。自分が死んで一年経ったら僕に送って欲しいというメモと共に、荷物の底に隠すように置かれていたそうだ。

それは、彼女の遺書だった。

僕へ宛てた、彼女の最後の言葉だった。

見つかってほしくなかったのかもしれない。

でも、見つけたら僕に読んでほしかったのだろう。

見慣れた文字が綴るのは、彼女の想いと後悔。そして告白。常人なら、見た瞬間に破り捨てて彼女の思い出ごと、存在しなかったことになってしまうかもしれない、とても重い手紙。

けれど、僕はもう常人ではなかったらしい。

手紙を見て感じたのは、彼女への揺ぎ無い愛だった。

まるでその手紙が彼女の身体であるかのように、僕はしっかりと抱きしめる。

——だいじょうぶ、ずっと一緒だよ

そう囁く声を聞きながら、失った温もりを思い描き続けた。
僕は、彼女を愛している。

出合いは田舎に暮らす祖父母の家。

その近所にある、緩やかな川の近くだった。

小学生の頃、僕は祖父母の家で過ごす夏休みを与えられていた。

普段は都会と呼ばれる場所に住んでいるから、夏休みぐらい自然の中で過ごしなさい、という教育だったらしい。

それは、初めて祖父母のところで過ごす夏休み。

この場所には友達も何もないけれど、どこまでも広がっていく山や森に、僕は言い様の無い興奮を感じていた。この世界のどこかには宝の山があると、結構本気で信じてもいた。

川には行かないようにと言われたけれど、そんなことを守るいい子ではない。

だから僕は、こっそりと川に遊びに行っていた。もちろん、雨が降って水かさが増している時はさすがにおとなしくしていた。子供でも、本当に怖いものは、何となくわかるものだ。

それは、田舎暮らしにも慣れてきた頃。

ここ数日の快晴で、少し水かさが減ってきた川原でのことだ。

その時、僕は見慣れないカニと格闘中。むしろカニしか見えていなかったと言える。

だから触れられるほどに近寄ってくるまで、僕は彼女が存在に気づかなかった。接近してくる存在に気づいたのは、彼女の影が僕の影と重なった、まさにその瞬間。

視線を上げた先に立っていたのは、一人の可憐な少女だった。

「あの……」

おずおず、といった様子で、彼女は僕に話しかける。

「かにさんは、いじめちゃいけないと、思う……」

そう声をかけてきた彼女は、困った顔で僕を見ていた。

僕自身に苛めているつもりはなかったけれど、傍からはそう見えるのかと思い、僕はカニと格闘するのをやめた。慌てて去っていくカニを見て、少女は少し微笑んでいるようだった。

それから彼女は少し恥ずかしそうにうつむき、僕をちらりと見て「ありがとう……止めてくれて。他の子は、聞いてくれないから」消えそうなほど小さい声で、僕にそう言った。

彼女は美雨という名前だった。薄いピンクの花柄がプリントされたワンピースに、あれだけの日光の下にいてもほとんど焼けていない白い肌。肩につく程度の黒髪。

まるで、マンガやアニメから飛び出してきたような美少女だった。思わず目を奪われて、苦しくて息ができなくなった。

彼女は地元のアパートに住んでいて、一人っ子で、おとなしすぎるせいかあまり友達はいないらしかった。一人っ子で友達が少ないあたりは、どこことなく僕と似ていると思った。

「あのね……友達になってほしいの」

美雨は僕の手を握って、はにかむように笑う。

むしろぜひ仲良くなりたかった僕は、その手を優しく握り返す。

大合唱するセミの声にかき消されそうなほど小さい「ありがとう」は、僕の心にしっかりと刻み込まれた。射抜くようなその微笑と、握った手の温もりと柔らかさと共に。

それから僕と彼女は、いつも一緒に遊ぶようになった。おとなしそうな美雨は意外と行動力はある方らしく、いつもワンピース姿だったけど、僕が行くところならどこでもついて来た。

二人で手や足や顔をドロだらけにして、夕暮れになるまで遊び続

けた。

時々は怒られたりもしたけれど、でも美雨との時間は他の何にも変えがたいほどに、充実していて満ち足りていて。まるで何かの中毒を起こしたように、僕は彼女と共に続けた。

いろんな場所に行った。

いろんなものを拾って集めた。

出逢った川原のそばにある橋の下のスペースに、拾った宝物を大事に隠した。あれは僕と彼女の大事な場所だ。集めたものは、他からするとゴミだったかもしれないけど宝物だった。

僕と彼女を繋ぎ合わせる、大切なカケラの一つ一つだった。

そして夏が終わる頃に、僕はいつもの場所へ戻る。

後ろ髪を引かれながらも、僕は彼女に「またね」と告げて背を向ける。これはさよならなんじゃない。来年も、その次も、僕はここにくるのだから。彼女の住むこの場所に。

彼女と共に過ごす夏を心待ちにしながら、僕は季節を回し続けた。

何度目かの夏が来た。

祖父母の家で過ごすいつも通りの夏だ。

もちろん彼女もいる。僕がいない間に仲良くなったのか、今年は普通に家まで遊びに来るようになった。縁側で一緒にスイカを食べっていると、祖父母の優しい視線を感じた。

「あのね、今日もあの場所にいこっか……」

川原で遊んでいるのは秘密だから、小さな声で耳打ちされる。

あの場所、とはもちろん二人だけの秘密の場所だ。二人で見つけたいろんなものに、適当な謂れをでっちあげて飾り立てた、橋の下の小さなスペース。

「お茶を持っていかなきゃね」

くすりと笑う美雨に、僕の心は跳ね上がる。何だか息苦しくて、頬が熱くて、僕は思わず美雨から目をそらせてしまった。ちらりと伺うと、美雨は不思議そうに僕を見ていた。

目があうとまた笑う。

そらす、笑う。そらす。笑う。

そうしているうちに、僕はこの感情を『恥ずかしい』と言うのだと気づいた。彼女の、僕と同じ色のはずなのにずっと綺麗な黒い瞳で見られると、なぜだかすごく落ち着かなくなる。

なのに、僕は嬉しかった。

美雨が僕を見てくれるのが、嬉しかった。

笑ってくれて、それが嬉しかった。

二人で過ごす時間が増えていき、祖父母との時間が減っていき。祖父母は少しだけ寂しそうだったけれど、同時に嬉しそうでもあった。僕に友達が少ないことを聞いていたのかもしれない。美雨と一緒にいるのを見て、安心していたのだろうか。きつと、僕は全身から美雨と一緒にいることを喜んでいたのだと思う。

けれど僕は、同時に何とも言えない気持ちを抱き始めた。

美雨はどこにでもついてくる。まるで影のように、ちょこちょこ。さすがにトイレにまではついてこないけれど、それでも彼女は入り口でしっかりと僕のことを待っている。

あまりに待ってくれるから、僕は一度だけ、イタズラをしたことがあった。携帯ゲームをそっとトイレまで持ち込んで、時間にして十分程度、ここに籠ってみることにしたのだ。

さほどの悪気はない、ちょっとしたイタズラのはずだった。しかし、つついゲームの方に集中してしまって、喉の渇きでそれに気づいた僕は慌ててトイレから飛び出す。

薄暗いトイレから明るい場所に出て、僕はそれを見た。

「遅かったね」

顔を真っ赤にした美雨が、少し疲れた様子で木の下に佇んでいた。浮かんでいたのは、いつもの笑みだ。目をうっとりとし、満面ではないが、けれど心からの喜びを表現している形。普段なら恥ずかしさからそらしてしまう視線を、外せなかった。

その時の衝動を、僕は言葉にできなかった。

それは間違いなく『恐怖』であったけれども、相手は美雨で、仲良しの友達で。そんな相手をお化けか何かと同じように扱うなんて、僕にはどうしてもできなかった。

それから美雨を、彼女の自宅まで送っていく。明らかに足取りが危うい彼女を、連れまわすなんて僕にはできなかった。……何よりも今日は、一緒にいたくなくなってしまったから。

だから、必死に言い聞かせて、説得した。

しばらくの間は拒否していた美雨だったがけれど、最終的には帰ることを選んでくれた。その妥協案が僕に送ってもらうこと。じゃないと帰らないと、美雨は言った。

その道中、当たり前のように手を握られた。本当に美雨なのかと思ってしまうほど、指に籠った力は強かった。でも僕はこれは美雨だと言い聞かせ、必死に気にしないようにした。

そうしないと、許されないほどのひどいことをしそうだったから。美雨の家は新築らしく、すごく綺麗で大きかった。後で祖父母に聞いた話だと、この周辺でもかなりのお金持ちの家なのだという。つまり、美雨はちょっとしたお嬢様ということだ。

「……ねえ」

自宅の門扉を開け、美雨が振り返りながら言った。

今まで見せたことが無い、それはどんよりとした色の声で。

瞳は、あんなにもキラキラしていた瞳は、まるで値踏みするようにじとりとじていて。

「また……一緒に遊ぼうね」

いつもの別れの挨拶も、その時ばかりはまったく違うものに聞こえた。僕は答えられずに息を呑む。美雨は、ゆっくりと僕に向かって歩き出した。いや、飛んだ。

彼女が押し開いた門扉は、数段の階段を上った上にある。彼女はその階段から、はねるように飛び降りて――僕にぎゅうっと抱きついた。やわらかい香りが、肺の中に染み渡っていく。

よろめきながら、僕は彼女の軽く細い身体を支える。

「み……」

名前を呼んだ。

呼ぼうとしたと思う。

けれど、彼女はその声を自分の唇で吸い取った。

ぬるりとした舌が僕の口の中でうごめいた。

舌が舌で弄ばれて、こすられて。

不快感に全身が震えて、僕は思わず美雨の肩を掴んだ。けれどなぜか、彼女を自分から引き剥がすことだけが、どうしてもできなかった。掴んだ手に、力は伝わっているのに。

どうして、美雨を引き剥がせないのか。

「……っ」

その時だった。

僕の中で渦巻く葛藤の中心を、唇が生んだ痛みが走り抜けていく。微笑みながら僕から身体を離す美雨。

その薄紅色の唇が、緋色に染まっていた。

僕の唇はズキズキと痛み、かすかに熱さえも集まってきた。うづく場所を舌でなめるとちくりと痛みが走って、そこがかすかに抉れているのを知る。まるで鋭い物を突き立てたように。

舌にじわりと広がる鉄の味。

僕はようやく、美雨に『噛まれた』と知った。

彼女の唇の赤の意味を理解した瞬間、僕はやっと彼女を『拒絶』した。突き飛ばされたその身体が、冷たく硬い門扉にぶつかる。けれど美雨は、痛みを浮かべることは無かった。

ただ『理解できない』といった様子で、不思議そうに首を傾げるだけだった。

けれどその眦に、うつすらと見えた涙の粒。

女の子を、美雨を泣かせてしまった——その事実に一瞬、躊躇う声が僕の頭の中で必死の説得をしてきたけれど、それより先に喉から飛び出した声を止めることはできなかった。

「もう美雨とは遊ばない！」

そして僕は、彼女に背を向けた。美雨は何度か遊びに来たけれど、適当な理由をつけてそれを断った。数日もする頃には、彼女は僕の周囲から完全に、存在しなかったように消えた。

季節は巡り次の夏休みになって――僕は祖父母の家には行かなかった。

その次も、次も。

僕は、美雨に会いたくなかった。

会ってしまえばきっと、僕は後戻りできなくなる気がしたからだ。僕が進むのではなく、僕の手をしっかりと握って離さないであろう美雨が、どこかへ連れて行く気がして。

怖かった。

違う世界を覗くのが、僕はまだ怖かった。

僕は高校生になった。

もう僕は、祖父母の家には行かない。

美雨がいるからじゃない。

確かにそれも理由の一つだったけれど、一番の理由は、祖父母がもういないからだ。

それは彼女を拒絶した、数年後の冬だった。いつに無く強い寒さに襲われた日、二人の家は炎に包まれて全焼。焼け跡から二人の遺体が発見された。ちょうど、寝室の位置だった。

原因はストーブからの出火だという。洗濯物をすぐ前に置きっぱなしだったのか、何か故障していたのか。その辺の詳しい事情を僕は聞かされていない。

ちなみに死因はどちらも一酸化炭素中毒だったという。生きたまま焼かれなかったことだけが救いだと言いた、葬儀での親類たちの静かな言葉は、今もはっきりと覚えている。

二人の墓は隣の県に住む親類の土地に建てることにして、焼け跡や畑は全部どこかに売り払った。葬儀も親類の自宅近くで行い、僕や家族があの場合にいくことはなかった。

そのことに言葉にできないささやかな安堵を覚え、いつしか美雨との楽しかった頃の思い出さえも記憶の片隅にある箱の中に押し込んで、無かったことにして過ごしていった。

美雨の最後の涙と、言えなかった言葉。

箱にしまえなかったそれらを抱えたまま、僕は中学から高校へと進学し。

——また、夏になった。

「暑い」

空を見上げて文句をこぼすも、気温も湿度も下がってはくれない。とうとう夏休みが始まって、僕はこれからどう過ごすかを考えていた。そして、それ以上に話題に上ってしまう彼女のことを、どう乗り切るべきか悩んでいた。

今は亡き祖父母がいた田舎で仲良くなった少女・美雨。

その話題は、生前の祖母を経由して両親に知らされていたのだ。お陰で未だに、愛に言ったらどうだとか言われる。確かに、僕にできた異性の友人なんて、今のところ彼女だけだ。

……いや、彼女は友人だったのだろうか。

友人にあんなことを、ましてや女の子がするのだろうか。

少女というものは、あの手の行為は選り抜いた相手とだけ交わす夢を見ている——というイメージがあるから、未だ美雨の行動の意味が分からないでいる。しかし尋ねる相手もない。

彼女は、何を思ってあんなことをしたのだろう。

彼女にとって僕は、本当に『友人』だったのだろうか。

一つだけ分かることは、僕は彼女に何かしら特別な感情を抱いていたことだ。それだけは何年も経った今でさえ、否定できないほどの存在感を伴い、心の片隅で静かに眠っている。

目覚める日は来なくとも、僕は美雨に強い感情を向け続けるだろう。

それが何なのか、わからなくても。

「……帰るか」

空を見上げるのも、暑さに対する苦情を呟くのにも飽きた。

呟けば雨でも降ってくれるなら、夜はそこそこに涼しく過ごせる

のだが。あいにく、僕に雨乞いの能力は備わっていないらしい。カバンを背負いなおし、僕は前を向いた。

すっかり見慣れた通学路。まっすぐに伸びる狭い道。

その、ずっと向こう側から誰かが来るのが見えた。

白いワンピースに、白い日傘。年恰好は分らないが、たぶん若い。その肌は太陽光の全てをはじき返しているかのように白く、すらりと伸びた手足はまるでモデルのようだった。

遠目でも言い切れる。

彼女は、間違いなく綺麗な人だ。

もちろん顔はまだ見えないけれども、心がそう確信した。

僕は少し歩く速度を速める。すれ違いざまに、日傘が落とす影で見えにくいその顔を、ちよつとだけ覗き見たくなったからだ。僕だつて一応は男だ。女性への興味は、それなりにある。

ワンピースは無地ではなく、うっすらと花の模様が描かれていた。桜のような淡い赤。足元は白いサンダル。確かミュールというやつだったと思う。かかとはあまり高くない。

左右にゆらりゆらりと揺れている、大体腰ぐらいの高さまで伸ばされた黒髪。

まるで宝石のように艶やかで、少し触ってみたくなった。

女性ではなく少女だったその人は、薄紅の唇に笑みを浮かべている。どこかで見たことがある綺麗な笑みだった。少しはにかんでいるようにも見え、満面の笑みのようにも感じて。

記憶の隅に追いやられた小さな箱が、かたんと存在を主張する。

——僕は、足を止めた。

——彼女も、足を止めた。

僕と彼女の間は何メートルかある。手は届かない。

けれど、声は届く。

「久しぶり、だね」

彼女はそう言って、日傘を少し傾けた。顔に落ちていた影が消え、そこに以前の儚さと美しさをそのまま残し成長した彼女が、僕を見つめて、昔のように微笑んでいる姿が現れた。

最後の姿よりも少しだけ大人びた、けれど昔と同じ儚さを漂わせる美雨。長い黒髪を風に乗せて躍らせながら、彼女は小走りに僕の元へやってきて。そして。

「やっと、やっと会えた」

——僕をぎゅっと抱き締めた。

「大変だったのよ……がんばったけど、帰ってこないんだもの」
そうするのが当たり前のことであるかのように、ゆっくりと重ねられる美雨の唇。

何年も昔、僕を縛り付けた感覚が、また僕の動きを奪っていく。
今度は、ただ重ね合わせるだけだった。

二人で僕の家への帰路を進む。

美雨は隣の地区の、そこそこ高いマンションに引っ越してきたばかりらしい。

あれからのことを美雨は、ぼつりぼつりと話してくれた。

僕の祖父母が死んでしまつて、その上に僕が来る理由がなくなつて、二重の意味でショックだったこと。どうにか親を説得して、ここに引っ越してきたこと。

九月からは——どうやら僕と同じ高校に通うことも。

「がんばったんだから、お勉強」

そう自慢するように笑う美雨。僕が通っている学校は、ここら辺の公立校では三本の指に入る学校だった。それなりの成績がないと、入学もできないし転入もできない。

そして話は僕が彼女を拒絶した、あの瞬間にいたる。
話し始めた美雨は、途端に不機嫌になつて。

「……だって、わたしをほつというゲームばかり」
気づかれていたらしい。

「わたしは、こんなに貴方が好きなのに。だから告白しようと思つたの」

「それが……あれ？」

「言葉で言うより、伝わると思つたの」

恥らうように頬を染める美雨。

確かに、伝わりはしたが……少々過激ではなかっただろうか。ましてや噛み付くなんてどんなプレイなのか。美雨は僕と同じ年のは

ずなのに、何だかすごく違う感じがする。

「あれは……おまじないみたいなもの」

マーキング、と美雨は言う。確かに親にも親しいクラスメートにも、そのケガは何があったと散々質問されまくってかなり困ったが……。さすがに女の子にされました、とは言えない。

あの時は、必死に転んだと言い訳し、ただただ治るのを待っていた。

「だいじょうぶ、もうしないから。だって、もっと強力な武器があるもの」

ふふ、と笑った彼女は、僕の腕をぎゅうと抱き締める。ああ、確かに、今の美雨には武器と言い切れるだけのものがある。わざと押し付けられるその感触に、僕は時の流れを知った。

昔はただ、儚さの漂う女の子だった。

守ってあげなければいけない、と思わせそうな感じだった。

今は……どうだろう。庇護欲を湧かせるところは変わっていないように思う。ただ、無邪気さと少しの小悪魔さが生み出され、少々タチの悪い感じになってしまったかもしれない。

もちろん、それは悪い意味ではない。しかし、美雨ほどの美少女が己の美を自覚し、それを最大限に行使すると——こうも破壊力のある武器、いや兵器になってしまうとは。

僕はそれを、身をもって体感していた。

「ここが、そうなの？」

「うん」

僕と美雨は、僕が暮らすアパートの前に来ていた。

築十年ちよっとの僕よりも若い建物は、アパートにしてはしゃれたデザインをしている。何でも町出身のデザイナーだか建築家だか

に、わざわざ依頼して作ったという話だ。
マンションでも通じそうだが、中身はアパート以外の何者でもない。

「……わぁ」

しかし、美雨はうつとりとアパートを見ている。

マンションというのだから、美雨が住んでいる場所はこと比べ物にならないほど、豪華な場所だと思う。だけど彼女はまるで宝でも見つけたように、きらきらした瞳で見上げていた。

その表情を見ると、思い出すのは端の下の秘密の場所だ。

もう無くなっているかもしれないけれど、あの場所は大切なところだった。拾い集めたいろんなモノだって、他の誰が何と言おうとも僕らにとっては全部全部宝の山だった。

互いに集めたものを披露する時。

美雨は、よくこんな表情をしていたように、僕は記憶している。

少し昔話を……と思った僕を晒うように、美雨の携帯が綺麗な音色を奏でた。曲名は分からないけれど、多分クラシックだ。テレビのCMか、音楽の授業かで、聴いた記憶がある。

「あ……パパとママが呼んでるみたい」

美雨は残念そうに呟いた。

それから、かちかちと携帯を操作して。

「私の家の住所とか、今からメールで送るね」

彼女がそう言った直後、僕の携帯が音を奏でる。先ほど、半ば強引に交換したばかりのアドレスが、そして個別に設定した着信音が、早速その役割を果たしている。

見てみて、と急かされるまま携帯を開き、届いたばかりのメールを開いた。てっきり住所だけだと思っていたのだが、そこにはマン

ションの外観らしき画像が添付去れていた。

確か、通学に使う電車での移動中に見えるマンションだったはずだ。ここなら大体の位置を把握しているし、最寄の駅も分かっている。おそらく地図無しでもたどり着けるだろう。

メールの本文には、そして住所と部屋の番号。

「事前に電話かメールをくれたら、下で待ってるから」

美雨は少し恥ずかしそうに、そんなことを僕の耳に囁いた。

これは……遊びに來い、ということなのだろうか。

問いかけようと僕は思ったが、美雨はただ微笑んでいるだけだ。

その微笑の奥にどんな思惑があるのか。それを僕に探る勇氣は無かった。

「夏休みが終わったら、テスト前とかに一緒に勉強しようね」

これまでは夏休み限定の付き合いだった。それが、オールシーズンになった。美雨はそれが嬉しくてたまらない様子で、僕の手をしっかりと握って軽く左右に揺らす。

「そうだ、科学なら任せてね」

美雨は笑う。

「科学が得意なの。昔から理科の実験も好きだったから」

昔のように、その笑顔は無邪気だった。

美雨と再会してから、僕は彼女と出歩くようになった。

夏休みの課題はあまり出ない学校で、七月中にほとんど終わってしまったからだ。美雨がいなかったらきつと、ひたすらゲームをするだけで、僕の夏休みが終わったかもしれない。

友人の家に遊びに言っても、たぶんやることはゲームだろう。

何せ、この暑さ。

出歩くのだけでも結構辛い。

ずっとエアコンがかかった部屋にいたい。

「今日はどこにいくの？」

そんな中で、美雨はとても元気だった。僕とこうして一緒にいられるのが、嬉しくてたまらないと言った様子を、まさに全身で表しているような感じだ。幸せさに満ち溢れている。

そんな彼女を見ると、僕は嫌とは言えない。

だから決まって、美雨の好きなところでいいよと僕は答える。

「じゃあ、今日は……」

美雨はうーん、と頭の中で地図でも広げているのか、しばらく目を閉じて悩む。そして適当な場所に向かって一緒に歩き出す。公園だったり、ショッピングだったり。いろいろだ。

僕は彼女に振り回される、それに対して、これという怒りはない。自分で望んだことに怒るとかバカにもほどがあるだろうし。けれど……怒りではない何かの気配を、僕は感じていた。

美雨に流されるまま、彼女と一緒にいる。

それは、思うと昔の自分とさほど変わらない状態だった。あの頃よりも、さらに流されているような気さえする。まだあの頃は、僕自身も彼女が望むものを望んでいたから。

かすかなひび割れの気配を、僕は感じていた。時折、彼女の『流れ』に反することをした瞬間に身体にちくりと突き刺さる感覚は、日ごとに強さと長さが増大する一方だ。

それはあの時の――トイレに入ったフリをしていた時の感覚。

――明確な美雨への恐れ。

僕の直感は叫んだ。

美雨から離れるべきだと。もうすぐ彼女は『変わる』と。けれどもう一つの直感はそれを否定する。お前は美雨が好きなんだ。だからいろいろ考えすぎてしまうのだから、今は彼女のそばで想いをしっかりと噛み締めて感じるべきだと。

そのどちらも選びたいというのは、きっと僕の我侭だろう。過去を繰り返すだけの未来は要らない。けれど美雨と一緒にはいたい。

許容と拒絶。

そのどちらも選べないまま、気づけば夏休みは残りわずかだった。宿題も無く、ただ美雨に誘われるままに遊びに行くだけの日々に、両親はなぜか意味深に笑っているだけだった。

今まで男友達しかいなかった息子に、突然中のいい女子が現れた。だから、いろいろと邪推して勝手に楽しんでいるのだろうと、その頃の僕は単純に考えていたのだけれど。

その笑顔の種明かしは、母の一言から始まった。

「あんたにも、やっと彼女ができたのねえ」

一瞬、母に何を言われたのかを、僕は理解できなかった。

何気ない朝食の時間。テレビでは最新ニュースが、声高に紹介されている。さっきまでそれについて父と話していたはずだ。いつの間に、母は僕に話を降ってきたのだろう。

母は、いや両親は、さも事実であるかのような口ぶりで続ける。

「美雨さん……だったっけ？ 昨日、その子のご両親が挨拶に来たのよ。娘がいつもお世話になってますって。義父さんと義母さんのところで知り合った子だったのねえ、美雨さん」

「色恋に興味が無いお前が、まさかなあ……」

「ちよ……ちよっと待ってよ。何の話？」

「あらあらとぼけちゃって、この子ったら……」

「見たところよくできたお嬢さんのようだし、大事にするんだぞ」

そして両親は、他愛の無い芸能人の話題へと移っていった。誰それが結婚しただの熱愛発覚だので盛り上がるが、僕はと言うとどんな話題など吹っ飛ぶほどの衝撃を受けていた。

二人は、何を言っていたんだろう。

確かに美雨は好きだけれど、それが親愛なのか恋愛なのか僕はまだわからない。彼女から向けられる想いは、間違いなく親愛以外の愛なのだろうと思うけれど。

というか、美雨の両親がうちに来た、とはどういうことか。

必死に頭を働かせ、浮かんできたのは――美雨の微笑みだった。

あの、無邪気さの奥に何を孕んでいるのかわからない、なのに気がつくといついつい見惚れてしまう微笑みだ。

あの笑みの底で、彼女は何を考えていたのだろうか。

僕を連れまわした美雨は、何を望んでいたのだろうか。

まさか、美雨はこういう展開を、頭と心に描いていたのだろうか。周囲からゆっくりと既成事実を作り上げ、僕が逃げないように取り囲む。ついでに首に縄でも引っ掛けてしまえば、もう僕はうかつ

に動くこともできない。

動くほどに首の縄は締め、網は確実に狭まって身動きもできなくなる。

夏休みも、あと一週間も無い。このままの調子で学校が始まった後を思うと、今は絶望しか見えなかった。美雨は学校でも変わらないだろう。周囲がそう思うよう、動くだろう。

そうになったら、僕はもう逃げられなくなる。

僕は、初めて美雨に恐怖した。

いや……前も、それに似た感情を抱いた気がする。

だが今回は、その比どころではない。あの頃は二人だけの秘密ですんだ。たった二人だけの世界だったから。今は違う。僕と彼女を取り囲む世界は、とてもとても広く大きくなった。

あの頃は、そして今までは適当でも許されたものが、もう許されない。

引き返すなら今のうちだと、誰かが囁いた。

食事を終えて部屋に戻った僕は、充電済みの携帯を握る。

手早く美雨を呼び出すメールを作成し、送信した。

「……はあ」

ため息とも安堵とも取れる空気を吐き出す。

僕は、僕にできる、いや僕にしかできない最後の手に出ることにした。今まではなあなあで済ませてきた全ての清算。流されるままになっていた事柄を、改めてきっちりする。

……そう、僕はもう一度、美雨を拒絶することにした。

決意してしまえば、少し気が軽くなった。

僕は美雨を呼び出した公園の木陰の下にいた。

彼女は少し遅れるかも、という返信を最後に沈黙している。公園の時計を見る限り待ち合わせた時間までもう数分とないが、美雨の姿はどこにも見当たらなかった。

思えば、いつも呼び出されるままだった。まさか自分から始めるの呼び出しが、こんな用件になってしまふなんて。複雑な気持ちのまま、未だ見えない美雨を思う。

彼女はきつと、おめかししてくるだろう。

僕からの呼び出し——デートの誘いなのだから。

それに最悪の一手を繰り出すことを、今更ながら後悔し始める。彼女の笑顔や気体を叩き壊す行為に、罪悪感を感じないと言えは嘘になってしまう。だが……もう決めたのだ。

仮に、僕が彼女を好きだったとしよう。

今は自覚をしていないだけで、僕はちゃんと彼女が好きだったとしよう。

けれど今は自覚をしていないのだから、好きではないと同じことだ。そんな状態で彼女に流されることは、彼女に対しても失礼に当たるとは、きっと遠くない未来で破綻する。

それだけは避けたい。

たとえば恋愛感情が芽生えなくても、僕にとって美雨は大切な存在だ。

失いたくは無かった。

「ごめんなさい、遅くなって……!」

そこへ、美雨が走ってくる。想像した通り、いつもよりずっと着飾っていた。白地にシンプルな柄がプリントされたワンピースは同じだが、髪留めなどがいつもより気合が入っている。

ずくり、と心のどこかがきしんだ。

今からあの笑顔を、曇らせなければいけない。

それでも僕は、美雨に言わなきゃいけなかった。

僕のために――そして彼女のために。

「お願いがあるんだ」

「なあに？」

美雨は無邪気に首をかしげる。

何でも言って、という幻聴を感じさせる笑顔だった。

「僕は美雨と付き合っているわけじゃない。もしかすると、お付き合いすることになるかもしれないけど、でも今は違うんだから、付き合ってるみたいにいるのはやめてくれないか」

僕は極力感情を込めないように、淡々と言いたいことだけを口にする。

「……え？」

美雨は何度か大きく瞬きをして、小さくそう言った。……と思う。あまりに小さな、吐息のような声だったから、空耳だったような気さえするほどだ。

「あの……それって」

彼女は動揺し、引きつった笑みを浮かべた。

そんな笑みをさせてしまうことを、僕は心の中でわびた。

「……あ」

しばらく視線をさまよわせていた美雨だったけれど、ある瞬間、それが止まった。まるで探していたものを見つけたようで、それは明らかに『豹変』と呼んでいい規模の変化だった。

ぎゅうう、とワンピースを握る。

怒りなのか、それとも悲しみなのか。

うつむいてしまった美雨は、僕には聞き取れない小さな声で何かを呟く。そのたびに手に力が籠っていつて、ただでさえ白いその指が、生気さえなくすほどの勢いで白くなる。

たまっていた何かを吐き出し、指をゆっくりと開き。

「……パパとママが、何か言ったの？」

美雨は、声を発した。

僕はゆっくりと首を横に振る。

すると美雨はゆっくりと顔をあげて、何も籠っていない瞳を僕に向けた。いつも喜怒哀楽のいずれかが籠る目をしていた美雨。その美雨から初めて、表情や感情が失われた。

その黒い瞳を見ていると、心の中を覗かれている気分になった。視線を合わせ続けることができなくて、僕は思わず視線をそらせてしまう。彼女にどう受け取られるかも考えずに。

やるんじゃないかった、と僕は心で呟いた。

美雨への罪悪感ではなく、美雨への恐怖から、僕は己の選択を後悔する。

だが、時はすでに手遅れだった。

「……パパとママが、何か言ったのね」

その声色は、明確な確信を持っていた。

僕はとっさに何も言えなくなり、彼女の考えを肯定してしまう。先ほど、あからさまに視線をそらせたことで彼女に植え付けた疑念に、今度は魔法のような栄養を与えてしまった。

僕の反応で彼女は、自分の両親が元凶だと思っただろう。

それは間違いではないのだが、僕はそれを彼女に知られたくは無

いと思った。特定の誰かを元凶にするのは、今回の場合はよくない
と思ったからだ。結果は、見事大失敗だが。

「わかった……」

美雨は低い声でそう呟き、僕に背を向ける。

その様子に、昔、彼女を拒絶する直前に感じた気配を見た。けれど、僕はまたぴくりとも動くことができなくて、ゆっくりと去っていくその背中を、ただ見送るしかなかった。

あれからしばらく経った。

美雨からの連絡は無い。

両親も、余計なことを言ってしまったとわかったのだろう。あれ以来、美雨のことが話題に上ることはなかった。それは嬉しかったけれど、余計に彼女の存在を思い出させた。

このまま、また美雨から離れていくのだろうか。
離れていけるのだろうか。

そう思い始めた頃、携帯がかわいらしい音色を奏でる。場所は自室。行儀悪くベッドに寝転がって、マンガを読んでいるところだった。両親は外出していて、僕しか家にいない。

半分寝入っていた耳に、聞きなれた音色が進入する。

——美雨専用の着信音だった。

しばらく迷って、僕は通話ボタンを押す。

「もしもし……」

『あ、起きてた?』

聞こえたのは、いつも通りの美雨の声だった。

あの日に僕が見た姿は、全部悪い夢だった気がするほどに。

『あのね、私の家わかるかな?』

「わかる……けど」

『じゃあね、ちょっと来てほしいの。屋上まで来てね』

「え……屋上?」

『家にはパパとママがいるもの。……じゃ、待ってるね』

通話が途絶える。僕はまだ行くとも行かないとも答えていない。

まるで、来ないはずがないと信じきっているような感じがした。そして、彼女のその考えは……見事正解する。

これという用事も無く、いずれ美雨に会わなければならないと思っていた。いい機会だ。

僕は携帯と財布を手には家を出る。親にはメールを出しておいた。美雨の名前は出さず、友達のところ遊びに行くと。けれど美雨のところに行ったというメモ書きは、部屋に残した。

なぜだろうか。

生きて帰れないかもしれない可能性を、僕は考えていた。

電車を乗り継ぎ、一度だけ訪れた美雨が住むマンションにたどり着く。いつ見ても、高級という言葉しか当てはまらない、豪華な佇まいの建物だ。全部で何階あるのだろうか。

アパートに入っただけの機械の前に立ち、僕は美雨の部屋の番号を押す。

しばらくして。

『先に屋上で待ってるね』

ずいぶんと息の弾んだ、美雨の声が聞こえた。かすかなブザーの音がし、ガラスでできた扉が開いた。僕は扉の向こうに見えるエレベーターの前に立ち、ボタンを押す。

昼前とはいえ、人気の無いマンションだ。見たところ、美雨の家以外にもそれなりに入居者はいるようだったが、通勤通学の時間からずれるだけでこうも人がいなくなるものなのか。

すぐに降りてきたエレベーターに乗り、一番上の階のボタンを押す。

一度も止まることなく、まっすぐに目的の場所に着いた。

僕は屋上に向かう階段を上り、その先にある鉄でできた扉のノブ

を回す。ぐりりと濁った音を立てて、ノブは綺麗に回った。このまま押し開けば、僕は屋上に到着できる。

だが——何とも言えない違和感があった。

こういう場所は普通の場合、嚴重に施錠されて、階段だって封鎖されているはずだ。少なくとも、僕が住むアパートはそうになっている。間違っても何かが起こらないように。

しかし階段の閉鎖は誰か——おそらくは美雨が取り除き、ドアも開錠済みだった。どこで鍵などを手に入れたのか分からないが、美雨はどうしても家ではなく屋上で話をしたいらしい。

その用意周到さに、早く来て、という彼女の声が聞こえそうだった。

だからこそ僕は、ノブを回したまま動けなくなる。

罫ではないかと——意味も無く疑ってしまう。とはいえこのままでは、何も始まらないし終わらない。僕は静かに息を吸って吐き出し、ゆっくりと扉を押し開く。

太陽の光に目を細め、かすんだ視界の中に彼女はいた。

僕に背を向けて立っている美雨。

振り向いた彼女の、白地のワンピースに——緋色の花が咲いていた。わずかに黒を帯びる赤い花が、薄い花をねじり伏せるように、彼女の前面を埋め尽くすように飛び散っている。

「ごめんね」

美雨はそう言って、少し悲しそうに笑う。

片方の腕を後ろに回して、何かを隠すようなポーズをとって。

「パパとママが、貴方のお父さんとお母さんに余計なことを言ったみたい。ちょっと気が早いだだけだと思っていたから。本当にごめんなさい。もう二度とないように説得したから」

美雨は笑っている。

「ねえ、これからどこかに出かけましょう？ 何でもしてあげる。うん、何でも。だって私は貴方がだいすきだし、だから好きなことをしていいんだよ？ 誰もジャマなんてしないし」

「美雨、服は」

「ごめんね。ちょっと汚れちゃったの。出かけるなら着替えなきゃダメだよ。どうせワンピースだからすぐに済むよ。下のロビーで待っててくれる？ 何なら着替え、見てもいいよ」

「そうじゃなくて……」

「……？」

彼女は、美雨は、不思議そうに笑っていた。

無言で問いかけてくる。

——どうして動かないの？

美雨はただ、不思議そうに僕を見ているだけだ。

僕が扉の前から移動しないからだ。僕が移動しないと、彼女はここを去れない。着替えとやらのために部屋に行くことさえ。けれど美雨はわかっているのだ。

体力で、僕に勝つことなど絶対にできないと。

無理やりに押しのけることは、できないと。

同年代の男子と比べ、僕は小柄で華奢な方だと思う。それでも、同年代の女子と比べて圧倒的に華奢で体力も腕力も無い美雨に、跳ね除けられたりするほど弱くはない。

「美雨、キミは」

何をしたんだ。問いかけた。

問われた美雨は少し目を見開き、そして。

「——だって、パパとママが、貴方を遠ざけてしまうんだもの」

にっこりと笑った。

そして、うしろに回していた手を前に出し、手のひらをゆっくりと開いた。

かららん。

そんな軽く高い音を立てて、それは屋上の硬い床を何度か跳ねた。それはナイフだった。たぶん、果物ナイフだ。そこには、明らかに果肉とは似ても似つかない赤いものが、べっとりと塗りたくられていた。刃だけでなく、その全体にだ。

僕は、彼女の言葉の意味を知る。

果物ナイフの意味。

彼女の衣服に裂いた赤い花の意味。

そして、ここに僕をわざわざ呼びつけた意味。

部屋がダメだという意味。

電話をする前かした後かは、わからない。だが彼女は、きっと僕が拒絶したあの瞬間にこうすることを決めたのだ。僕の拒絶は、自分の両親の『要らぬお節介』のせいだと確信し。

これ以上、邪魔をされないために——。

「……どうして」

「え？」

「美雨は、そんなことをするような子じゃ、なかった」

優しい子だったのに。

記憶の中からそっと取り出した、初めて見た彼女の姿は、最初の言葉は。

こんなことをするような、考えるような子ではなかったのに。

美雨は表情をくるくると変えた。葛藤と微笑みと無を、何度も繰り返す。見たことが無い表情もいくつか浮かんでは、何も無かった

ように消えていった。表情が表情を押しつぶした。

彼女は最終的に――微笑を浮かべる。

いつも通りの、けれどいつもよりも透き通った笑みだった。

これが、彼女の本当の姿、なのだろうか。

変化に戸惑い、何も言えなくなった僕を他所に、彼女はその足を動かす始める。

ゆっくりと後ろへ。

美雨は、僕を見たまま後ろへ歩き出した。

「私ね、今までがんばったんだよ？　がんばって、貴方と再会しようとした。だけど貴方は帰ってこなかった。あんなに苦労したのに、がんばったのに、あんなに、あんなに」

かつん、と靴音がする。

美雨が遠ざかる。

「何度も何度もがんばったの。あんまり混ぜちゃうと、バレちゃうかもしれないから慎重に量を計算して、時間をかけて……だけど貴方は戻らなかった。来てって、狼煙まで上げたのに」

ゆっくりと遠ざかる。

「だから、待っているだけではダメだと気づいたの。それでパパとママに頼んで、ここに引っ越してきたのよ。貴方と同じ学校に通うために、またがんばって勉強だってしたんだから」

美雨が遠ざかっていく。

僕は、動けない。

「でも……ダメだった。貴方は離れていくばかりだった。だけど一緒にいたい。ずっと一緒にいたい。愛されたいの愛したいの。貴方だけのモノになりたい、貴方を独占したいの」

くるんと彼女が身を翻す。

「私に残された手段は……もう、これだけ」

美雨はまるで踊るような足取りで——ふわりと、屋上の淵に立った。

一瞬で、彼女の意図を僕は理解した。

「美雨……こっちに。僕の手を」

ゆっくりと歩み寄りながら、僕は彼女に手を差し伸べる。

あと少しで届く。

「これで貴方はずっと私のモノだね。だって貴方は私のことが好きだもの。私を愛してくれているもの。だから貴方は私から逃れられない。永遠に私たちは、強い愛で繋がれあうの」

美雨は泣きじゃくるように、ただ微笑んで。

「——ばいばい、大好き」

今度もまた踊るように後ろへ飛んで、ゆっくりと僕の視界から消えていって。

彼女は、陽炎の中へ飲み込まれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8509y/>

囁く声に手と影重ね

2011年11月26日20時59分発行